〈書評〉瀧田佳子『アメリカン・ライフへのまなざし——自然・女性・大衆文化』

（東京大学出版会，2000年3月）
定価（本体価格3500円＋税）

佐　藤　宏　子

研究者でなくてもアメリカに関心をもっている人が興味をそそられ，本を手にとって見たくなる魅力的なタイトルである。著者が「序として」の冒頭で述べているように，「日本を比較文化史的に考察する場合，アメリカのプレゼンスが重要な視点を提供する」（1頁）からである。あえて「比較文化史的」という限定をつける必要はないかもしれない。黒船来航以来の一世紀半，特に第二次大戦の敗戦からの半世紀，日本はアメリカという「存在」を逃れることができない状況におかれてきた。それは，政治，経済の分野のみならず，意識に上ることすらない日常一般の生活の細部にまで亙っている。このように巨大で捉えどころのない茫漠とした主題を，著者は副題である「自然・女性・大衆文化」という三大噺で巧みに括っている。より厳密に言えば，ヘンリー・デイヴィッド・ソロー，ケイト・ショパン，ジャズ・エイジ，漫画「ブロンディ」に集約している。そこにタイトルの「まなざし」の意味があると評者は考えている。「まなざし」は『広辞苑』によれば「目差・眼差」と書き，「目の表情。目付き。まなこざし」と定義されている。感情をこめた一つの視点を持つ，主観的な見方である。(著者の意図をこのように理解する評者にとっては，タイトルの英訳 *Looking over "American Life"* には不満が残る。概観ではないはずである。)

本書は，十一の章からなり，それを「アメリカン・ライフと自然」，「女性のライフをめぐって」，「モダン・ライフ・アメリカ」の三部に分けている。これらの十一の章のうち二つが書き下ろし，残り九つの章は四半世紀にわたって様々な形で発表されてきた論文を，分割，改題，加筆したものである。このような形式をとったために生じた問題については後述することにして，まず，内容を簡単に紹介する。第一部「アメリカン・ライフと自然」は「トランセンデンタリスト・ソローと東洋」，「日本におけるソロー主義」，「シンプル・ライフのゆくえ」の三章から構成されている。第一章はタイトルが示すように十九世紀半ばの思想家ソローの生き方を，東洋思想，主としてヒンズー教の聖典であるバガヴァッド・ギーターへのソローの傾倒を中心に検討している。『市民としての反抗』などの「個」にもとづくソローの政府論の根底に東洋思想の影響があることが指摘され，「個人の精神的改革に基づく社会改革論は，…彼のヨーギとしての自己修養，自己完成と結びつくものである」(23頁)と述べられている。アメリカへの「まなざし」ではなく，東洋へのアメリカの視線が問題とされ，タイトルに触発された読者の視線は一瞬とまどうが，主題とされているソロー自身のアメリカへの姿勢も含まれていると理解できる。また，次章以下の日本におけるソロー主義を検討する上で，ソローの思想や生き方の理解は不可欠であり，なぜ

日本にソローの信奉者が輩出したのかを理解する上で共通する基盤を提示していると考えられる。

第二章「日本におけるソロー主義」では，明治期にソローのような生活を実践した徳富蘆花，本格的にソローを論じ，彼を「天然詩人」(42 頁）と位置付けた内村鑑三，明治三十九年に創刊された雑誌『簡易生活』に掲載されたいくつかのソロー論，特にソローを日本で初めて「文明批評家」(45 頁）として扱った金子喜一，『ウォルデン』の全体訳を試みた水島耕一郎などについて，比較文学研究者としての著者ならではの興味深い情報が提供されている。この章では，ソローは万華鏡のように乱反射する。例えば，蘆花は「ソローの著作を読んだ形跡はない。...しかしソローと比較することにより彼の人生観はより明確になる」(36 頁）と著者は考えている。トルストイに心酔し田園生活を試みた蘆花と，その影響を受けつつソローを発見した人たちの姿が，ソローという鏡を間に浮かび上がる。ソローは日本では「天然詩人」,「文明批評家」,「シンプル・ライフ」の実践者という三つの姿で紹介されたが，それがそれぞれ単独で論じられ，統合されたソロー像が描かれなかったという著者の指摘は興味深い。

第三章「シンプル・ライフのゆくえ」では，大正期から昭和初頭にかけての「生活者」としてのソロー主義者が紹介される。畔上賢造，吉田絃二郎，斎藤茂，江渡狄嶺について，思想家，生活者としての彼らのソロー理解と傾倒が紹介されるが，多くの紙数が農村改革に生涯をかけ失敗者に終わった堀井梁歩にあてられている。前章同様豊富な一次資料を駆使して説得力のある論を展開しているが，特に堀井の生涯と著作が丁寧に辿られ，近代化の中で社会の矛盾に直面し，その解決を模索して苦悩した彼の姿は読者の心を打つ。そのため，日本のソロー主義者について「彼らの『生活』は文明批判のあらわれであろうが，それがどこまでソローほどの集中度，激しさをもっていたか」(62 頁）という批判はやや手厳しいという印象を持つ。第二章，第三章では著者はソローの「激しさ」を強調し，「激しく怒れる人ソロー，文明に挑戦状を叩きつけた人ソロー」(57 頁）と述べてソローを称賛し，日本でのソロー的生活の実践者，思想家を批判している（この点で，第一章で示されるソロー像との間に落差が感じられる)。その批判の妥当性は認めながらも，歴史的，社会的，文化的文脈でのより広い比較文化的な考察が求められているのではないかという印象は拭えない。ソローが生きた時代の西欧社会におけるユートピア思想とその実践，近代日本における社会改革運動はともに複雑な文脈の中で考察されるべきものであり，同じディスコースはあり得ないからである。

第二部「女性のライフをめぐって」は「女性の発見」,「目覚めるまで」,「家庭＝パラダイスへの挑戦」,「若松賤子と女の目覚め」,「あはれの少女」の五章で構成されている。『目覚め』の翻訳を手掛け，ケイト・ショパンを研究の対象の一つの核としている著者が，本書の中でもっとも力を入れられた部分と思われる。初めの三つの章は，1960 年代から始まったアメリカの女性解放運動の流れをたどった後，ケイト・ショパンが十九世紀末に発表した『目覚め』をとおして，女性が自分の人生，生命，肉体を自らのものにしなくてはならないという自覚にいたり，その結果生じる周囲との葛藤，挑戦を考察している。「家庭＝パラダイスへの挑戦」では，留学中にショパンが生きたこのような時代と接した有島武郎が，『或る女』の早月葉子の創造に至る「アメリカ」の意味が検討される。ショパンの経歴，アメリカ文学史におけるショパン評価の変遷，作品の意義が手際よく解説さ

れ，ショパン研究の手引きとして重要なものになりうると考えられる。完全に忘れ去られていたわけではないが，地方色の短編作家として1890年代のアメリカ文学の片隅に置かれていたケイト・ショパンが，1960年代末からのフェミニズムの波の中で突然アメリカ文学の中心に持ち出された「事件」は確かに注目に値する。著者がフェミニズム批評による『目覚め』再評価の動きを「新しいキャノン」(106, 145頁）が作られたと繰り返し表現している中に，ショパンと「出会った」著者の興奮のようなものすら感じられる。しかし，フェミニズムをはじめとする現代の新しい批評は「キャノンを作る」ことを否定することから出発しているのであり，その点で表現に配慮が必要ではなかったかという気がしている。

第一部のソローの場合とは違って，ショパンは作家として日本の文学や女性に直接影響を与えたことはない。著者はショパンを十九世紀末のアメリカにおける女性の自我の「目覚め」のために象徴として用いている。彼女が生きた時代に始まった女性の自立への波が，その後の一世紀の間に，様々な形をとって日本社会に押し寄せ，複雑な反応を引き起こしたというのが，著者がショパンを選んだ理由と理解される。そのような影響が「若松賤子と女の目覚め」という章で示されていると考えられる。この章は本書のために書き下ろされたもので，アメリカ人宣教師によって作られた学校（のちのフェリス女学院）で教育された若松賤子が，巌本善治との「お互いの人格を認めあう，愛情に基づく結婚」(155頁）の中で「ホーム（家庭）」(158頁）の重要性に気づき，バーネットの『小公子』翻訳を試みる過程が示されている。賤子の翻訳が「原作ほどセンチメンタルでも感情過多でもない」(159頁）という指摘をとおして賤子の自立した女性の意識が明らかにされている点，また賤子の翻訳の文体への言及など興味深く，今後一層掘り下げた研究が期待される。ただ，この章の主体が若松賤子にあるためと思われるが，イギリスで生まれ，よりよい生活を求めてアメリカに移住し，大成功を収めた後も大西洋を往復しながらアメリカでの根を決して離れることはなかった作者バーネットについての考察がされるべきではなかったか。また，原作が書かれた時代のアメリカはいわゆる金ピカ時代だったのであり，そのような時代にこの作品がアメリカでどのように読まれたのかを（子供より大人たちが熱狂したと言われている）主人公セドリックのアメリカ性との関連で分析されていれば，明治期の日本との比較の視点がより厚みを持ったものになりえたのではないかと思う。

「あはれの少女」は「大和田建樹と『明治唱歌』」という副題が付され，賛美歌，英米の民謡が日本の音楽教育に取り込まれていった過程が示される。昨今急速に変貌しつつある学校での音楽教育のルーツを考えさせられると同時に，ある世代から上のものには郷愁を覚える一章である。ここにもアメリカの影があったのかと改めて認識した次第である。

ここで，中間にはさむ形になったが，異なった形態で発表されたものを単行本にまとめる際の問題点を指摘しておきたい。特に第二部でいくつか気になった記述があるからである。第一部でも例えばソローについての伝記的な解説が第二章になって初出というようなことがあったり，同じ記述が繰り返されるといった書き下ろしでは整理されたのではないかと思われる箇所が目に付いた。また，第一部の三つの章はいずれも四半世紀前に発表されたものであり，その間にソロー研究は大きく進展している。著者の立場からしても研究の指針を得ようと本書を手にとる学生や若い研究者が多いと思われるので，何らかの配慮が必要ではないだろうか。第二部の第四章「女性の発見」にはおそらく講義を書き起こし

たことが原因と思われる誤述や曖昧な表現がみられる。一例を上げればショパン以外の二十世紀初頭の女性作家について述べている部分である。ウィラ・キャザーについて「現在では彼女の作品のなかのセクシュアリティに関心が持たれ，『ひばりの歌』などにも新しい読みの可能性が探られている」(110 頁) とか，イーディス・ウォートンの『歓楽の家』の筋書きがあまりにも漠然としているといった点である。現在，キャザーに新しい批評の光があてられていることは事実であるが，セクシュアリティとの関連で考察されているのは主として他の作品であるし，『歓楽の家』の筋を語るのであれば，二十世紀初頭のアメリカにおける女性と経済力と結婚の問題にもとづいて語らなければ説得力がないのではないか。文学作品について語る時，自分としての一つの解釈を示す必要があると評者は考えている。自分の「読み」である。『目覚め』，「一時間の物語」などのショパンの作品の結末について，「皮肉な最後の文章」(124 頁)とか「どんな思いでヒロインが死んだかは当の本人にしかわからない」(107 頁) といった曖昧な言葉ではなく，著者としてのはっきりした「読み」が欲しいという不満が残る。『目覚め』の最後について，入水自殺をするヒロインの最後の意識には「さまざまな思い」(123 頁) が浮かんだという解説だけではすまされない。死を前にした彼女の脳裏には束縛のイメージの連鎖が起こっているのであり，その指摘が必要ではないだろうか。文字を媒体として読者に語る際には，より厳密な姿勢と言葉の選択が求められると考える。

第三部は「『新青年』の時代」，「モガ／新しい女」，「ブロンディと青い山脈」の三つの比較的短い章からなっている。「モダン・ライフ・アメリカ」というタイトルはおそらく独立した三つの言葉として，またそれぞれが重なり合って増幅していくものとして読むべきだろう。「『新青年』の時代」と「モガ／新しい女」はポーやホイットマンの日本への紹介とその影響，フィッツジェラルドに代表されるジャズ・エイジと呼ばれた1920年代のアメリカの文学，芸術や無声映画といった文化と，その瑞々しさにひかれた大正期の日本の芸術家や若者たちの感情が「モダン」という言葉に収斂されている。著者の博識が光る部分である。最終章「ブロンディと青い山脈」は第二次大戦後，占領軍の進駐とともに日本に押し寄せたアメリカ文化の大波とそれを巧みに活用して変容をとげた日本社会を，新聞に連載された漫画ブロンディと映画『青い山脈』に焦点をあてて考察しているが，この二つの大衆文化の代表作を組み合わせた著者の目は鋭い。当時の日本の大衆にアメリカの家庭生活のステレオタイプを提示した「ブロンディ」は，ダグウッドのサンドキッチに象徴される物質的な豊かさと同時に，家庭内での夫と妻の関係を日々日本人の意識の中に刷り込んでいった。それをどのように日本人が吸収し，自分たちの生活を変革していったかは，現在の日本の社会が一つの解答を示していると考えられる。それは，「アメリカン・ライフへのまなざし」を出発点としながら，決して「アメリカン・ライフ」にはならない文化と文化の出会いの面白さである。それから半世紀，この興味深い化学反応はますます複雑化する傾向にある。著者の「アメリカン・ライフ」へのまなざしが 1940 年代の敗戦直後で終わってしまったことは残念である。

読後に感じたことを「ないものねだり」を承知の上で述べてしまったが，それは本書が読者の意識を刺激して，多くのことを考えさせ，一人ひとりが自分の「アメリカン・ライフ」への視線を改めて認識する機会を提供しているということであって，本書の欠点というよりは長所というべきではないかと考えている。日本とアメリカの文化交流を考えるな

ら，より適切な主題を考えることが可能かもしれない。例えば，有島武郎の代わりに宮本百合子を取り上げた方が，問題はよりはっきり提示できたかも知れない。ショパンの代わりに1920年代に日本の女子教育者の間で読まれたシャーロット・パーキンズ・ギルマンの『男が作った世界』や『女性と経済学』をとりあげてもよかったと思う。あるいは，1930年代に翻訳され，アメリカの男女の軽率さとその結果生じた家庭の崩壊をとりあげて，教育界に問題を提起したウォートンの『この子供たち』を論じることも可能であろう。ショパンが日本の研究者に知られ始めたのは1970年代に入ってからであり，一般の読者には依然として未知の作家であって，直接に日本の文学や女性に何も影響を与えてはいないのである。しかし，この種のコメントは際限なく可能であり，かつ不毛なものであろう。

ここで扱われている「アメリカン・ライフ」は白人の中産階級の「アメリカ」であるという批判も当然予期されるべきものである。現在のアメリカに「アメリカン・ライフ」などと定義しうるものが存在しうるかどうかという疑問もあるだろう。国家の枠組みすらが揺らぐ現在である。しかし，本書の存在意義は別のところにあると考えている。冒頭で述べたように，「まなざし」という主観と関わっているからである。本書は第二次大戦後の半世紀を日本で生活し，この四半世紀をアメリカ研究と関わってきた著者が，自分の「まなざし」で見た「アメリカ」だという点である。明治以降の日本の近代化を文化的な伝統として背負い，紅い口紅と断髪につかの間の自由の幻想を見たモガたちの娘として生まれ，法の上での平等を獲得し解放されたとはいえ，様々な点で女性の自己実現を阻む社会の中で生きてきた研究者が，アメリカに向けた視線の軌跡が本書には示されているのである。その意味で，さらに一歩踏み出したより大胆な「個」としての自己の表現があってもよかったのではないだろうか。